

MARK RONSON

SPIT'EM OUT! "it's absolutely raw"

feature interview

MARK RONSON

11/21(金)に待望の来日が決定したDJ MARK RONSONの単独巻頭インタビュー。9月に発売され、世界中から高い評価を得た1st Album "HERE COMES THE FUZZ"の制作秘話から、自身の音楽観や人生観に至るまで、普段は聞く事の出来ない心の内を飾る事なく語ってくれた。約2年振り3回目の来日となる今回は一体どんなセットで熱い一夜を演出してくれるのか... ぞろぞろ期待あれ!

■まず、初のアルバムリリースおめでとうございます。待望のリリースとなったわけですが、気分はどうですか? またNYでの周囲の反応はどうですか?

ありがとう。自分の作ったアルバムをリリースするのは、初めての事だし、凄く嬉しい。エキサイティングだよ。今のところ、NYでの反応も凄く良いから、嬉しい限りだね。

■いつアルバムをリリースするというアイデアを思い付いたんですか? また、そのきっかけは?

意外かもしれないけど、今まで一度も自分のアルバムを作りたいとか、作るやうな気持ちで考えたこともなかったんだよね。他の色々なアーティストの為にトラックを提供したり、誰かのアルバムとかをプロデュースしたりするのは、凄く好きだし楽しんでやってはいたんだけど。今回エレクトラから、『好きなアーティストをゲストとして迎えて自分のアルバムを作ってみないか?』っていう話がきたんだ。今までそんな事思っても見なかったから、最初はちょっと驚いた。でも、少し時間をもらって考えてみたら、面白そうだった。思ったので、やります! って返事をしたんだよ。

■HARLEMでもDJがメインのコンピレーションをリリースしました。今回のアルバムはDJであるあなたがプロダクションの主体となっているわけですが、DJが制作をコントロールする意義とは何だと思えますか?

基本的にDJは、フロアを盛り上げるのぼんや曲か? っていうのを分かっていなきゃいけないわけだろ? そうじゃないとDJとして成功出来ないと思う。例えばDJ Premier, Clark Kent, そしてTimbaland。他にも沢山いるけど、みんな素晴らしいDJであると同時に素晴らしいプロデューサーでもある。やっぱりクラブDJとして現場で活躍している人が作る曲と、そういう人が作る音っていうのはある程度の違いがあるんじゃないかな?

もちろん、DJをやっている全員がプロデューサーとして成功出来るというわけにはいかないけど、でもやっぱり他の人より、そういう点でも少しは有利だと思う。■どのアーティストにどのビート、という組み合わせはマークの選択で決まっていたんですか? それともアーティストに選んでもらったんですか?

両方かな。『このビートはこのアーティストに合うな』とか『きっとこのビートを気に入ってくれるだろう』って考えてそのビートを渡して聴いてもらって、気に入ってもらえたらそのまま作業に入るってパターンもあったし、逆にアーティストが、意外なビートを気に入ったりすることもあった。例えば、Mos DefとMOPの曲があるだろ? あのトラックは最初MOPをイメージして作ったビートだったんだけど、スタジオでMos Defがああトラックを聴いて凄く気に入っちゃってさ。しょうがないから、MOPとMos Def両方にやってもらうことにしたってわけ。

■因みに普段曲を制作する際には、基本的にアーティストをイメージしてビートを制作するのですか? それともビートが先でそれに合うアーティストを選ぶ感じですか?

正直言って、DJでありミュージシャンでもある自分としては、やっぱりどうしてもリリックよりもビートの方に気持ちが傾いてしまうのは確かだね。ビートにどっぷりハマってからは、リリックにハマるっていう感じかな。まあ、世の中にはNas, Jay-Z, GhostFaceみたいに、どんなトラックでも素晴らしいものに仕上げちゃう、どんなトラックだろうがヤバイ曲になってしまうっていうスキルを持ったラッパーもいるけど、でもやっぱり僕はほとんどの場合が、先にビートに集中してしまうし、先にトラックに心を奪われることが多いんだ。だから実際に制作してる時も、『このアーティストの為に、イメージに合わせてトラックを作る』って事になると、なかなかうまくいかない事が多かったりするんだ。もちろんそれが全てというわけではないけれど、まあ結局作ったビートを自分で聞いて『良い』って思った時は、そのアーティストも気に入ってくれるものだからね。それが一番ベストな関係であると思うけど、やっぱりビートが完成した後にはアーティストのイメージを膨らましていくっていう方が、自分にとってナチュラルな感じがするのは確かだね。

■レコーディングが一番苦労したことは何ですか? アルバム1枚を作り上げるのに、ほとんどすべてを

自分でやろうとしたことかな。やってみたら結構大変だった。トラックも自分で全部作って、A&Rも自分でやって、挙げ句ラッパーとかアーティストのスケジュールを調べて、日程を決めたりとかまで自分でやったんだ。今考えたら結構凄いな事だね。

■次のアルバムをリリースする予定は? 次のアルバムに参加して欲しいと思うアーティストは?

次のアルバムを出すかどうかはまだ分からない。今のところ全然考えてない。今制作中の曲もあるし、次の曲のアイデアとかはもう頭の中で出来上がってはいるんだけど。でも多分そうやって出来た曲は自分のアルバムに入れるより先に、誰かのアルバムの為に提供しちゃう事になるんじゃないかな。

だから特にこの人に参加して欲しいとかも、まだ考えてないよ。今回のアルバムに参加してくれた様な素晴らしいアーティストと共演することは本当に光栄なことだし、これからも他の沢山の才能あるアーティストと共演出来たらいいなっていつも思ってる。それが、自分のアルバムでも他の人のアルバムでもね。

■あなたの人生で影響を受けた人は誰ですか?

DJとして影響を受けたのは、DJ Stretch ArmstrongとJules。僕がNYでクラブに遊びに行くようになった頃、よくStretchのプレイしているパーティーに行っていたんだ。彼のレコードの選び方もレコードのかけ方も、彼のDJとしてのスタイル全てが凄く衝撃的だったし、今でも凄く好きなんだ。言葉遊びをするように、リリックの繋がりをうまく使ってミックスしたりとか、曲のボリュームを落としてお客さんにそのHOOKの部分で歌わせておいて、次のレコードをかけたたりするんだけど、その選曲もいつも面白いんだ。凄く勉強になったよ。

一方でJulesは僕がレアグルーヴとかに興味を持つようになったきっかけを与えてくれた人物なんだ。彼のおかげで数えきれないぐらいのレアグルーヴのクラシックスを知ることが出来た。Faze-Oの“Funkin for Jamaica”から“Riding High”までね。あとオールドスクールヒップホップとダンスホールクラシックスの選曲の良さにかけては彼の右に出るものはいないね。

プロデューサーならRick RubinとDJ Premier。この二人は誰がなんと言おうと『ヒップホップの伝説』だし、誰に聞いてもこの答えが帰ってくると思うけど。やっぱり外せない2人だね。Rick Rubinは20年以上も前にラップとロックのギャップを埋めて、その2つのジャンルの橋渡しをしたんだ。Beastie Boysの“license to ill”とかRUN DMCの“Raising from Hell”とかのクラシックスをプロデュースして、その後Red Hot Chili Peppers, The Cult, そしてRage Against Machineのクラシックスと呼ばれる曲を数多く世に送りだしている。彼がこの音楽業界に与えた業績って凄く大きいと思うし、彼程の才能がある人もなかなかいないよ。彼の成し遂げた事、そして彼のキャリアは僕にとって見本となるものだし、僕も彼の様なプロデューサーになりたいと思うよ。Premierは、テキサス出身のプロデューサーでありながら、NYのヒップホップシーンに革命を起こした。彼のサンプルのチョップの仕方とかドラムの鳴らせ方が、僕の今のプロダクションスタイルに大きな影響を与えていることは間違いないね。Biggie, Nas, Jay-Zといった伝説のMC達の最高の作品として名が上がるものはほとんどPremierの作品だし。彼も伝説と呼ばれるに相応しいプロデューサーであることは誰の目にも明らかだよ。

■では、ひとりの人間として影響を受けたのは?

それはもちろん僕の母親さ。彼女は今まで僕が人生で経験してきた事、今の僕という人間を形成している事柄全てのサポートシステムであり、インスピレーションであり、そして決して枯れることのない知識の泉であり、無償の愛を与え続けてくれるかけがえのない存在さ。

■DJをする、プロダクションではどちらが好きですか?

両方。DJもプロダクションも大好きだよ。プロダクション、つまり音楽を制作する事は、この世の中にずっと残るもの、ひとつの永遠の芸術品を作り出すこと。そしてDJという仕事は逆に、何人ものお客さんに対して音楽をかけて、そこでその瞬間にしか感じる事が出来ないヴァイブを作り出す仕事だ。その瞬間に感じる興奮と感動が全てなんだ。永遠の感動と一瞬の感動。両方素晴らしいものだと



思わない? どちらか1つなんて選べないな。

■日本に来日しているDJの多くが何かしらのコレクターなんですが、マークは何か集めているものとかはありますか?

スニーカーと人形。オールドスクールなクラシックスなやつが好きなんだ。NikeのDunkとAir Force 1と2。音楽業界でコレクターの人は沢山いるよね。僕の周りでも、妹も300足とか持ってる。それに比べたら僕なんてまだまだだよ。今とこ100足ぐらいかな。あと、つい最近なんだけど、Nikeから限定のスペシャルエディションって形で僕のオリジナルのスニーカーを作って販売したんだよ。Dunkの“Ronson-Here Comes the Fuzz”バージョンだよ。ブラウンとカーキのやつ。日本で発売されるかどうかわかんないけど、日本に行く時は何足か持っていくつもりだから、その時にはどんな感じのスニーカーかみんなも見れると思う。

■日本には何度か来日されていると思いますが、日本の印象は? 日本のファンをどう思いますか?

日本は大好きだよ。日本のキッズ達はヒップホップの純粋な部分、本当のヒップホップは何かを深く理解していると思うし、凄くリスペクトしている。素晴らしいと思うよ。日本に行ったらとにかく買い物ばかりしてやるよ。日本でレコードショッピングするのは大好きだよ。今度行ったら、もちろんまた買い物に行くよ。レコードと、あとスニーカーと、洋服も欲しいな。

■日本のアーティストをプロデュースすることに興味はありますか? また国外のアーティストをプロデュースする予定は?

最近日本のヒップホップを聞く機会があまりないから、名前とか出て来ないんだけど、でも、8年ぐらい前にJ-Liveと一緒に日本に来た時、一緒にパフォーマンスした日本人のヒップホップグループは凄くカッコよかった。僕の友達でもあるMASTERKEYが昔やってたグループも何度か聞いたことあるけど、それもドープだったな。ちょうど先週までイギリスに居たんだけど、イギリスからも沢山良いグループとか良いラッパーが出て来てよ。凄くドープなラッパーとか沢山居たよ。Dizzy RascalってUKのラッパーが居るんだけど、彼はドープだね。

■彼以外に、最近マークが目目している新人アーティストは?

ALLIDO RECORDSっていう新しい自分のレーベルを立ち上げたんだ。僕と僕のパートナーであるRich Kleimanと二人だね。すでに2人の才能あるアーティストとサインしたよ。

1人はRhymfestっていうシカゴ出身のラッパーで今年のSkribble Jamで優勝したんだ。僕らは今、彼の為に今まで聴いたこともない全く新しい音を用意しているところさ。例えて言うなら“Classic rockとClassic hip-hopの融合”っていう感じかな? 聴いてみればわかると思うけど、ほんとに格好良いから楽しみにしてよ。

もう1人は、オーストラリア出身の男性シンガーでDaniel Merriweatherっていうアーティスト。彼はまだ20才と若いんだけど、彼の声は本当に素晴らしいんだ。ここ何年も聴いたことがないぐらい素晴らしい声と才能の持ち主だよ。難しいけど、彼の声を例えるとしたら、PrinceとD'Angeloの間ぐらいっていいのかな? あと、僕のアルバムの“Tomorrow”っていう曲でQ-TipとコラボしているDebi Nova。彼女はコスタリカ出身のシンガーで、ちょうど彼女のアルバムの為に4曲を仕上げたところだよ。イメージ的には“Sergio Mendes Brazil 66 meets Fania All-Stars”(モダンバージョン)ってとこかな? 今まで僕が作ったなかでも結構気に入ってる曲だね。それから、やっとなの妹のアルバムにも曲を提供する事ができた。妹のSamantha RonsonはRoc A Fellaが初めてサインしたロックアーティストなんだ。彼女のアルバムに収録されてる曲も凄くカッコいいよ。“Waitresses meets Bow Wow Wow”って感じて、凄くイイ感じの80年代のヴァイブが詰まった曲だよ。どのアーティストも、どの曲も凄くカッコいいし、どれも僕のお気に入りだから、みんなもチェックしてみてくださいよ。

■11/21(金)のHARLEMでのパーティーはどういうセットを用意していますか?

それは内緒だよ。でも、絶対楽しいパーティーになることは間違いないから、皆遊びに来てよ!

■あなたにとって音楽とは?

シンプルなキックからスネア、ドラム、そして壮大なマーラーの交響曲まで、世に存在する音の全てが(音楽)なんだ。そして音楽はメロディー、リズム、それぞれのコンビネーション、またはその両方の素晴らしいコンビネーションによって人の感情を揺さぶり、何かを心に残してくれるもの。僕にとって音楽とは、毎朝目を覚ます理由かな。それがスタジオに行って制作をすることだったにしても、ただ家で聴くだけにしてもね。音楽は僕がまた新しい1日を始めようと思う1番の理由。音楽とは、それ無しには生きていけないといっても過言ではないぐらい、僕自身、そして僕の人生にとってなくてはならないものだね。!!!

MARK RONSON / HERE COMES THE FUZZ



Now On Sale
WPCR-11659
2,400yen (Tax out)